

---

# 使い魔はGALAXY\_S\_?

スライム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

使い魔はGALAXY | S | ?

### 【Nコード】

N3904Y

### 【作者名】

スライム

### 【あらすじ】

ヴィントレーゼ魔術学院で落ちこぼれの少女、リーズ・アンクテイルは使い魔の召喚に立場の逆転を賭ける。だが、召喚して出てきたのはどう使役すればよいのかまるで分からない四角くて薄い箱型の何か。それは異世界でスナガワトルという名の男が持つケイタイデンワという代物だった！ 圧倒的な高精彩を誇るディスプレイと、処理能力の高いデュアルコアCPUを搭載したスマートフォン、GALAXY | S | ? が今、異世界で火を吹く! ?

## プロローグ

春の柔らかい陽射しに包まれる中、リースは帆船からその島に降り立った。

潮の匂いを含んだ風に、黒い広つば帽子が飛ばされないうつ手で押さえる。服の上から身に着けている広幅の黒マントが、風に煽られてバタバタと音を鳴らした。

今日の天気は雲一つ無い快晴。

空に太陽の光を遮るものは一切無く、リースの立つ位置から遠目に見える塔や城のような建物を照らしている。

遠くから眺めている状態でも、それらの全容を視界に収めるには、見上げる必要がある程の大きな建築物。リースがそれらを、珍しそうに眺めていると、リースに続いて船から降りてきた少女が、その隣に立つて弾んだ声を上げた。

「やっと着きましたよ　ここがヴィントレーゼ魔術学院ですか。これからの六年間、この場所で私達は過ごすのですね」

褐色の肌をした白髪の少女が、親しげにリースに話しかける。

この少女とリースは、魔術学院の新入生を大陸からこの島へと運ぶ船の中で、偶然に同室になったのが初対面だ。

まだ出会ってからさほど日数も経っていないのに、このエルヴィという名の少女はやたらとリースに懐いていた。

リースにとっても、彼女の陽気な性格は眩しくもあり、好ましくもある。

口数の少ないこんな自分の何処が気に入ったのか不思議だったが、エルヴィはリースにとって初めての友達だった。

とある理由によって、リーズはこれからの学院生活に様々な不安を抱えていたのだが、これは幸先がいいんじゃないかと思う。

リーズが感慨深げに学院の外観を眺めていると、エルヴィは堪えきれないといった様子でリーズの手を掴み、学院の中でも一際大きな建物を指差した。

「さっき船員の人に聞いたのですが、丁度もうすぐあそこでAクラスの実合が行われるそうですよ！ リーズも一緒に見に行きましょう。」

エルヴィはリーズの返事を聞く前に、その手を引いて駆け始める。それに為すがまま引つ張られ、リーズも足を動かした。

リーズもその実合は見ておきたかったので、抗議の声は上げない。むしろ、リーズの目的の為には見て置かなくてはならなかった。

（私はこの学院で成すべきことがある）

初めて友達が出来たことで浮かれそうになる心を、リーズは自分が此処に来た理由を思い出して引き締める。

リーズはエルヴィに手を引かれながら、Aクラスの実合が行われるという巨大な建物を見据えた。

ヴィントレーゼ魔術学院。

それは世界中の魔術師の見習い達の中から、学院が規定した一定の水準以上の魔力を持っている者のみが集う学舎。

その卒業生は各国でも優遇され、将来が約束されていると言っても過言ではない。

特に学院で定められているランクの最高位であるAクラスに達した者は、いずれも多大な影響力を持つ地位に就き、各々の国で歴史に名を残す偉人となる者が多かった。

その理由は、この学院でのみ学ぶことができる召喚術にある。

学院が規定する魔力量を満たした者だけが扱えるその魔術は、狭間の世界と呼ばれる異界から一体だけ召喚獣をこの世界に呼び寄せ、使役できるというものだ。

召喚獣の力を得た魔術師は、他の魔術師とは一線を画す力をその身に宿す。

その特別な魔術師達の中でも、さらに一握りの実力者と言われるAクラスの者同士の戦いが、今リーズの眼下で行われようとしていた。

この島の中央に位置する場所にある、巨大な半球型の屋根をした建築物。

学院の関係者からは闘技場と呼称されるその建物の観客席で、リーズとエルヴィは眼下に位置する試合場を見下ろす。

地を揺るがすほどの歓声に包まれながら、その試合場では二人一組の選手が四人、左右に分かれて向かい合っていた。

その四人の丁度上空には、観客達にその戦いの詳細が分かるよう、大規模な幻影魔術によって試合場を映し出している。

その映像を見て、エルヴィは感嘆の声を上げた。

「ふわぁ〜、凄いですね あんな魔術、初めて見ましたよ！」

「私も」

「それに、凄い観客の数です！ 人の声って一杯集まると地面が揺れるんですね〜」

「うん」

「いきなりAクラスの勝負が見られるなんて、私達は運が良かったですね」

「よかった」

リーズの素っ気なさそうに聞こえる返事に構わず、エルヴィがはしゃぐ。

エルヴィには、まだリーズが抱えるもののお話を話していないのに、気を悪くした様子もなくリーズに話しかけ続けた。

そのことを不思議に思いつつも、リーズなりに懸命に声を出してエルヴィに応じる。

そうしている内に、試合の開始を告げる音が闘技場に響き渡った。と同時に、試合場にいる各々の召喚獣が眩い光を放ち、それぞれの召喚主へと吸い込まれていく。

その光は召喚主へと移り、その全容を光で覆い隠した。

召喚獣と、その主の融合。

それによって召喚主は、使役する召喚獣の特性によって様々な力を得る。

やがて選手の体から光が収まると、真っ先に二人の人間が前に飛び出し、衝突した。

片方は、体の所々に赤い鱗が見え隠れする、頭にドラゴンのような骨の角を生やした女。

片方は、甲殻類のような漆黒の皮で体の節々を覆い、悪魔のように目を金色に輝かせた男。

召喚獣との融合によって、二人の体はそれぞれの召喚獣の影響を受けた姿に変体していた。

両者共に、常人を遥かに凌駕した身体能力によって、激しい肉弾戦を繰り広げる。それも、ただ殴り合うのではなく、二人とも体を動かしながら謳うように呪文を唱えていた。

美しい旋律のような声を伴って、洗練された体術を繰り広げるその様は、まるで華麗な舞歌を見ているかのような錯覚を起こす。

女が先に呪文を唱え終わると、周囲の地面から何本もの巨大な炎の柱が立ち上り、それぞれが蛇のようにうねりながら、傍にいる女ごと男を襲った。

それに続いて男が呪文を唱え終わり、男の周囲に出現した幾つもの黒い球体が、その炎の蛇を残らず引き寄せて吸い込んでしまう。

女がその黒い球体に囲まれて逃げ場を失ったところで、女の後方に控えていた選手が呪文を唱え終わった。

先程の炎の柱を束ねたものよりも、さらに数倍以上も大きな炎の渦が巻き起こり、男と女がいる場所を丸ごと焼き払う。

その炎は黒い球体を全て薙ぎ払い、男の体を焼くことに成功した。味方の炎に巻き込まれた女は、自身の召喚獣の特性なのか、炎の只中であってまるでダメージを受けていない。

男が全身に火傷を負わせながら後方に下がり、炎の中から脱出してくると、傍に駆け寄った男の味方選手が、丁度呪文を唱え終わった。

男の体が光で構成された膜に覆われ、その身にあった火傷をみるみるうちに治癒してしまう。

結局、どちらの二人組にもダメージは残らず、戦いは仕切り直しになった。

その一連の戦いを見届けて、リーズが息を呑む。

隣にいたエルヴィが驚愕の表情をしながら、感動とも畏怖ともつかない声を上げた。

「凄いですね……それに、とても綺麗です」

「うん」

「あそこが、リーズの目指す場所なのですね？」

「……うん」

エルヴィの言葉に、リーズは少し尻込みしながらも頷いた。

リーズが成すべき目的は、Aクラスのさらに向こう側にある。

(だから私は、絶対にあの境地に辿り着かなければならない)

リーズは眼下の試合場で続けられる戦いに圧倒されながらも、自身心に改めて決意と覚悟を刻んだ。

リーズが自身の召喚獣と対面するのは、それから数ヶ月後のこと

である。

## 第一話

それは窓の存在しない薄暗い部屋にて執り行われた。

その部屋の中央に立つ小柄な少女の唇から、力のある言葉が紡がれる。辿々しく紡がれる呪文が、時折擦れたように乱れるのに合わせて、床に置いてある無数のロウソクの火がゆらゆらと揺れた。

ヴィントレーゼ魔術学院の魔術師にとって、今後の命運を握るといっても過言ではない使い魔の召喚儀式。

産まれながらに声が出にくいという不利な条件によって、学院史上、最悪の落ちこぼれという烙印を押されることを余儀なくされていたリーズ・アंकテイルは、その使い魔の召喚に全てを賭けていた。

魔法の呪文は、詠唱を途切れさせると失敗してしまう。リーズはこの召喚魔法で、既に両手の指では足りないほどの数の失敗を繰り返していた。

だが、魔術師一人に一匹までという制限のある使い魔の召喚は、何度失敗してもリスクはない。一度成功してしまえば、使い魔が消えることはないのだ。

だから、魔法詠唱を高確率で失敗してしまうリーズは、その欠点を強力な使い魔の力で補おうと考えたのである。

不幸中の幸いか、リーズは魔力だけは学院史上でも屈指の大きさを持っていた。

だからその魔力が許す限り、ありったけの力を込めて召喚呪文を唱える。

見えない力の奔流が、リーズの長い栗色の髪を揺らめかせた。

そしてとうとう、リーズは召喚魔法を詠唱しきるのに成功する。床に出現した蠢く幾何学模様の魔方陣を確認して、リーズは安堵の息を吐いた。

そして、床の魔方陣が眩い光を放出しはじめると、リーズは固唾を呑んでそれを見届ける。期待に膨らむ胸を持って余して、体をウズウズとさせた。

そこに、込められるだけの魔力は込めた。リーズの考えが正しければ、数多くの使い魔の中でも、類を見ないほどの強力なものが召喚されるはずである。

現れる使い魔は一体何であろうか？

この世界で最強の使い魔と謳われるドラゴンか？

それとも、上位の精霊の類かもしれない。

もしかすれば、伝説上の神や悪魔ということも

そんなことを考えている内に、魔方陣の光が一つの形に収束していき、召喚される者の姿を象っていく。

その予想外の小ささに、リーズは小首を傾げた。

召喚獣とは、大きいもので人の半分ぐらい。小さなものでも膝くらゐまでの大きさはある。

だが、今リーズの目の前で収束していく光は、明らかに手の平ぐらいの大きさを象っていた。

そのことに、リーズは何か嫌な予感を覚える。

自分の中で沸き上がりそうになった強い不安を、リーズは首を横に振って払った。

(使い魔の能力と、大きさは関係ない)

リーズは自分にそう言い聞かせて、その光が収まるのを待つ。やがて完全に光が消え、リーズのいる部屋が元の薄暗さを取り戻すと、それは姿を現した。

その分厚い札のような形をしたそれに、リーズは目を丸くする。それは静かに床の上で鎮座しており、いつまで待っても動き出す気配はなかった。

反応を待っていても埒が明かないので、リーズは恐る恐るその物体を手に見てみる。

それは、リーズの知らない何かで構成されていた。近くでそれを観察すると、凄まじく精緻で洗練された形状に驚く。

だが、リーズにはそれがどういう存在なのかが全く理解できなかった。

そもそも、それは今だにピクリとも動き出す気配を見せないのだ。一瞬、何かの間違いではないかとも思うが、召喚魔法を終えた後に感じる繋がりは、しっかりと目の前の物体から感じる。

召喚魔法で召喚した使い魔とその術者は、目に見えない繋がりをもち、その繋がりをもって術者と使い魔で魔力を共有する。

そしてまた、その繋がりによって言葉や知能に隔たりのある使い魔と意志疎通が可能だった。

リーズは、その手に持つ自分の使い魔と交信を試みる。

『こんにちはわ。私の意志、伝わってる？ 言葉が分かる？』

その交信は、手に持つ物体を通じて異世界にまで飛んだことを、  
この時のリーズは理解していなかった。

> i 3 4 5 9 1  
— 4 1 6 4  
<

## 第二話

俺、砂川透には友達が少ない。

いや、本当は少ないどころか一人もいない。だがこう言っておけば某ライトノベルのように女の子との出会いが沢山あるかもと思った。全然そんなことはなかったが。

顔は人が寄りつきにくい強面であるのに、虎の名前を冠した少女が家に突撃してくることもない。

さらには、生まれつき特定の言葉や状況で声が発しにくくなる症状のせいで、俺はとことん無口だ。そのせいで高校の同級生には怖い人だと誤解されているが、偶然が重なって番長に祭り上げられ、不良が集まってくるなんてこともない。そもそも、今時の私立高校に番長なる地位が存在するはずがない。

正真正銘、俺は友達が一人もいなかった。

これでも高校に入学したばかりの数ヶ月前は、友達を作ろうとあらゆる手を尽くし奔走したのである。

もちろん、部活にも入ってみた。

ずっと友達がいなかったせいかゲームや漫画などの一人遊びに詳しかった俺は、同好の士が集まっていそうな漫画研究部に入部したのだ。

そしたら、次の日に漫画研究部は廃部してしまった。どうやら漫画研究部の方々は、俺が彼らを財布代わりするつもりだと勘違いしたようだ。

元々少なかった部員達が一斉に退部届を出したせいで、残った部員が俺一人になってしまい、さらには顧問まで逃げたので漫画研究部は廃部。

早々に悪い噂が立った俺を受け入れてくれる部はなく、さらには

クラスの人間にも完全に悪人のレッテルを貼られる結果となつてしまった。

今ではもう、俺の座っている机の周囲は妙に距離が空いてる状態である。

授業中の教師ですら俺と目線を合わせようとしない。

俺はこの状況に、もう半ば諦めていた。

開き直つてふてぶてしく椅子に座り、今行われている授業に耳を傾ける。

だがこの時、黒板に書いてある問題の解答に、教師が珍しく俺を指名する気配を見せたのだ。

と同時に、頭の中に声が響く。

「じゃあ、この問題を砂が」

『こんにちはわ。私の意志、伝わってる？ 言葉が分かる？』

「ああ？」

「……佐藤くん、分かるかね？」

「あつ……」

頭の中に響いた言葉に反応して上げてしまった声が、丁度教師を威圧するかのようなニュアンスになってしまった。

それに怯んだ教師が指名する人を変えてしまう。それにより、ますますクラスメイト達に誤解が広がっていく気配を感じた。

俺はそれに軽い舌打ちをする。そして、さっきの声は何だったのかが気になり、左右を見渡した。

周囲に座っている奴らは、俺と目を合わせようともしない。この中に、俺に話しかけてくる奴がいるとも思えないのだが……

『せっかく誤解を解くチャンスになったかもしれないのに……何だ  
今のは？幻聴か？』

『……幻聴じゃない』

頭の中の声が、俺の思考に返事をする。

……もしかして俺も、某ラノベにあったエア友達というものを習  
得してしまったのだろうか？ あまりに寂しすぎて頭がイカれたか？

俺が眉間にシワを寄せて頭を抱えても、頭の中の声は容赦なく続  
いた。

『こんにちは。私の名前はリーズ・アंकテイル。あなたを召喚し  
たのは私』

召喚？ 何を言ってるんだこの幻聴は？

『私にあなたのことを教えて。名前があるなら名前を。あなたがど  
ういった存在で、どういう力が使えるのかを私に教えて欲しい』

なんだか妙な質問をしてくる幻聴だ。

その時、俺はふと思った。

こう考えるのは末期症状なのかもしれないが、もしかしたらエア  
友達というのも悪いものではないかもしれない。

例えばそれが二重人格だろうが、違う考え方を持つ人格と会話でき  
るならば、それは立派な友達ではないか！

そう考えた俺は、とりあえず頭の中の幻聴と話を適当に合わせて  
みることにした。

『俺の名前は砂川透だ。私立の洛城高校に通う学生。使える力は……えーっと……少し絵が得意だ』  
『……………』

俺の自己紹介に沈黙する幻聴。

もしかして、何か失敗したか？ というか、俺は自分の幻聴相手とさえ親しくなれないのか？

俺は焦って自分の幻聴に呼びかけた。

『おい、沈黙しないでくれ。俺は何か間違えたか？』

『ごめん、言っていることがよく分からなかった。……さっきから思っていたのだけど、あなたは動けないの？ なぜピクリとも動かない？』

『あ？ 何言ってるんだ？ 俺は動いてるぞ？』

試しに俺はその場で手を振ってみる。そのせいで、周囲の奴らがチラチラと訝しげな視線を向けてきた。

まあ、今の俺はどう見ても挙動不審だろう。……よく考えると俺、本格的に頭がやばいのかも知れない。

『私には動いているように見えない』

『ああ？ とういうかお前、幻聴のくせに俺の姿が見えてんのか？』  
『だから、私は幻聴じゃない。それに、あなたの姿はちゃんと見えている』

『どういうことだ？ お前には、俺がどう見えている？』

『……………私とあなたは感覚を共有できる。今、あなたに私の視界を送る』

『あ？ 何を言ってる』

とそこで、俺の視界が唐突に変化した。

いつもの見慣れた授業風景から、見慣れない薄暗い部屋の中へ。俺はそれに驚いて、思わず立ち上がってしまった。

すると、幻聴が途切れて俺の視界が元に戻る。

気が付けば俺は、教室のクラスメイト達の視線を一身に集めていた。

「砂川くん、一体どうしたのかね？」

流石に無視できなくなった教師が、俺に声をかけてくる。髪の毛の薄い、見るからに気弱そうな中年の男性教師だ。名前は覚えてない。

俺は、その教師が立つ教壇のほうへと歩み寄った。

教師があからさまに怯むが、俺の声の大きさと、まことに言葉を伝えるには近寄るしかない。

「…………ちよつと気分が悪いんで…………保健室行ってきます」

「あつ、ああ」

俺はその教師が頷いたのを確認すると、そのまま教室を後にした。

教室を出た後、すぐにまた例の幻聴が聞こえてきたので、俺は保健室には行かずに学校の屋上へと来ていた。

ここならば、人に見られることもないだろう。

俺は屋上の端に座り込み、目を閉じてリーズとやらの視界を覗いていた。

そのリーズは今、鏡の前に立って俺に姿を見せながら話している。鳶色の瞳に、栗色の髪を腰のあたりまで伸ばした小さな少女だ。外見上はかなり幼く見えるのだが、これでも俺と同じ年ぐらいらしい……。

小学生みたいな小柄な体型に、目がクリクリとして大きい童顔をしているせいで、どうも実年齢よりも幼く見られるそうだ。

そんなリーズと話をしている内に、俺はだいたいのことを把握した。

どうやらリーズは、俺の携帯電話をリーズのいる異世界に召喚してしまったらしい。

何かどこかで読んだライトノベルのような話である。普通ならば信じないで自分の頭を疑うところだが、俺の制服のポケットからは確かに携帯電話が消失していた。

俺の使っているGALAXY | S | ? というスマートフォンは最

新のモデルではないにしても、高校生にとつては非常に高価なものである。最新モデルから一つ前のものを、貯めていたお小遣いやお年玉を使ってやっと買えたのだ。

できれば、返せと怒りの声を上げたいところなのだが、相手の外見が幼いせいか非常に怒りにくい。しかも、それが可愛らしい女の子なのだから尚更だ。ただでさえ人付き合いの経験が少ない俺にはハードルが高すぎる。

そんな俺の内心は知らずに、リーズは手に持っている携帯電話に視界を移した。

『このギャラクシーという道具は一体何ができる？』  
『何ができるって言われても……』

リーズの視界を通して、俺は自分の携帯電話を見る。リーズに側面のボタンを押すように指示して、その携帯電話の状態を確認した。驚くべきことに、電波が繋がっている上に電池の残量が回復している。

これは一体どういう原理なのかリーズに聞いてみると、しばらく時間を置いてから、もっともらしい推論が返ってきた。

『そのデンパというものや、デンチというものが何なのかは分からない。でも、このギャラクシーを通じてそっちのトオルと繋がっていることと、私からの繋がりを通じてギャラクシーと魔力を共有していることで何か影響があったのかもしれない』

『……すまん、何を言ってるのかよく分からない』  
『……要するに、私も何が原因がよく分からないということ』

まあ、お互いがお互いの世界のことをよく知らないのだから、それはしょうがないかもしれない。

とりあえず今は、あるがままの事象を受け入れることにする。  
そして改めて、携帯で出来ることをリリースに説明してみることに  
した。

電波さえ繋がっているならば、できることはいくらでもあるはず  
……なのだが、それには大きな壁があった。

『……文字が読めない』

『そりゃそうか……って、そういうえば何で俺達は言葉が通じてるん  
だ？』

『召喚者と使い魔は言葉が通じなくても意思疎通ができる。だから、  
私の言葉をトオルが理解できるようトオルの知っている言葉に翻訳  
されているのだと思う』

『なるほどな……』

文字が読めないとなると、使用法も限定される。

さらには、次にリリースが言い出した条件に当て嵌まる機能は何も  
なかった。

『できれば、まずは戦闘に使えるようなものを教えて欲しい』

『戦闘に？』

『そう。それが一番重要』

『……すまん、そういう機能はない』

『……え？』

これは声による会話ではなく、繋がりを通じて直接頭に言葉を送  
る心話のようなものらしい。だから、リリースが俺の言葉を聞き取れ  
ないという事態は起こりえない。

それでも、思わず聞き返さずにいられなかったということは、そ  
の事実はリリースにとってよほど受け入れ辛いのもかもしれない。

だが俺は、その事実をリリースに伝えるしかなかった。ここで誤魔

化したとしても、すぐに発覚してしまうことなのだ。

『携帯電話は戦いに使う武器じゃない。こっちの世界の生活用品の類の物だ。……正直、そういう物騒なことに使えそうな機能は何も思い浮かばない』

『そんな……』

リーズの打ち拉がれた声が頭に響くと、唐突に視界がぼやける。それはリーズの目から流れる涙のせいだと気が付くと、俺は凄まじく焦った。

何しろ女の子に泣かれるというのは初めてである。

今回のことに自分に責任はないはずなのだが、何だかとても強い罪悪感に心が圧迫された。

何て慰めればいいだろうか？

そう頭を悩ませてみるが、どんな言葉をかければいいのか皆目見当も付かない。俺の人付き合いの経験値は限りなく低いのだ。

『……泣いてるのか？』

結局出てきたのは、そんな言葉。

その言葉に反応して、リーズの視界が横に揺れた。どうやら首を横に振ったらしい。

分かりづらいが否定の意を示したのだろう。だが、質問しておいて何だがリーズが泣いているのはバレバレである。

俺は途方に暮れて、沈黙した。

よく考えれば慰めの言葉をかけようにも、透はリーズのことを何も知らないのだ。

俺はリーズの滲んだ視界を眺めながら、彼女が泣きやむのを待った。

### 第三話

たしかに私の抱えるハンデを無視して、強力な召喚獣だけで状況の好転をと考えるのは浅はかだったかもしれない。

それでも、この結果はあんまりだと思った。

一縷の望みを賭けていた召喚獣は、強力な力どころか戦う力さえないと言うのだ。

ただでさえ私は落ちこぼれだというのに、さらには召喚獣の力も弱いとなると、もうどうしようもない。

私は何としてもAクラスに辿り着かなければならないというのに……。

自分の不甲斐なさが悔しくて、私は目から溢れ出すものを止められなかった。

運命は、何故こうも私を追い詰めるのが好きなのだろうか？

物心が付いた頃から、何度も何度も自分に降りかかる不条理に泣いて、何度も何度もその運命に呪いの言葉を吐いてきた。

それでも、私はこれまで必死に藻掻いてきたのだ。

どうしようもない自分を何とかしようと、あらゆる努力を惜しまなかった。

だが私につきまとう不条理は、その努力を嘲笑うかのように叩き潰す。

これまでは辛うじて挫けずにやってこれたが、今回のことで私はもう心が折れかけていた。

このどうしようもない私を、どうすれば目的にへと至らせることができるだろうか？ その糸口さえ何も思い浮かばない。

ひとしきり泣いた後、私は胸に酷い空虚感を抱えながら、呆然と

視線を彷徨させた。

私が視線を動かしたのを感じ取ったのか、トオルの声が私に伝わってくる。

『えっと……落ち着いたか？』

『……』

『あゝ、えっと、なんだ……これも何かの縁だ。よかったら話を聞  
くぜ？』

『……え？』

『落ち込んだ時はな、人に話を聞いてもらうといいんだそうだ。話  
してる内に自分の頭の中で整理ができて、少しは気分が軽くなるん  
だよ。この前読んだラノ……本にそうあった』

『……』

もしかして、私を慰めようとしてくれているのだろうか？  
意表を突かれて私が思わず沈黙すると、トオルは慌てた声を届け  
てきた。

『むむ……よ、余計なお節介だったか？ やっぱ、さっき出会った  
ところの得体の知れない奴にや話せるわけないか』

そんなトオルの言葉で、私は漠然と彼の人柄を理解する。

多分、優しい人なのだろう。

まだ初対面に近い私に、親身になって慰めてくれる程には。

『……ううん、そんなことない』

私は首を横に振ってから、目尻に残っていた涙を拭う。

追い詰められていたせいか、私はその優しい誘いに縋り付いた。

私はあまり喋ることができないので、今までこんな風に誰かに話を聞いてもらったことはない。

でも、この心話と呼ばれる召喚獣との意思疎通には声は関係ない。最初はたどたどしく遠慮しながら話していたものの、そのうち私は胸に溜まっていた様々な感情を吐き出していた。

トオルは、もはや支離滅裂になってしまっている私の愚痴や弱音を、黙って聞いてくれる。

私が自分の声のことと、そのせいで学院での成績が最悪なことを話すと、トオルがポツリと呟いた。

『……俺と同じだな』

『え？』

『いや、こつちの話だ』

『……』

思わず聞き返してしまっただが、トオルの言葉はしっかり私に伝わっている。

もしかすると、トオルも私と同じことで悩んでいるのかもしれない。

だがそのことを私が問う前に、トオルが言葉を続けた。

『つまりリーズは、その声が出にくくなる症状のせいで、魔法の呪文が上手く唱えられないんだな？』

『うん』

『そして期待してた召喚獣は、ただの携帯電話だったと……何だか悪いことしちゃったな……』

『ううん。トオルのせいじゃない。悪いのは私』

そう、恐らくは私が何かミスを犯したのだろう。

現に、召喚した対象と心話の対象がちぐはぐになってしまっている。本来の召喚対象はトオル自身であったのが、私の何らかのミスによって、その持ち物だけが召喚されてしまったのかもしれない。少し余裕の戻った頭で、私は自身の召喚術のことを振り返る。

その間に沈黙していたトオルが、ふと何かを思いついたよな声を届けてきた。

『……いや、待てよ？ リーズ、その魔法の呪文ってのは、他の何かに記録した音でも発動するの？』

『音を記録？ そんなことができるの？』

私が驚いた声を上げると、トオルはあっさりとそれを肯定した。

『その携帯電話ならできるぜ。とにかく、どうなんだ？』

『……魔力を持つ者が唱えないと、呪文は発動しない』

『うーん、じゃあ無理か……』

『でも、魔術師の召喚獣は魔力を主と共有している。だから、もし召喚獣が呪文を発声できるなら、その呪文は発動するはず』

『なるほどな。……一つだけ、戦いに使えそうな機能を思いついた』

私はそこまでの会話の流れで、トオルの意図することを理解していた。

たしかにそれならば、声によるハンデは埋められるかもしれない。微かにだが、私の胸の中に希望の光が灯る。

だがトオルが提案したそれは、私の想像を越えたものだった。

> i 3 4 5 8 9  
— 4 1 6 4  
<

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3904y/>

---

使い魔はGALAXY\_S\_?

2011年11月10日06時13分発行